

## 特集：入学

## 新入生にすすめる 10 冊の本

大橋 一晴（筑波大学 生命環境系）

いまわしいストップウォッチなんか気にするな、わかるか？  
ランナーとは自分を相手に走るんだ。自分の中のベストのものを相手にな

— B. ハインリッチ『人はなぜ走るのか』より

## はじめに

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。本稿ではちょっと趣を変え、私がこれまでに読んだ本の中から、とくに皆さんにおすすしたい 10 冊（主に自然科学関連）を紹介したいと思います。これらはいずれも、ただ面白いというだけでなく、私自身が手元において何度も読み返したいと思うものばかりです。なお、紹介する順序は私の気まぐれによるもので、本のおすすめ度を反映しているわけではありませんのであしからず。

## 1) 人類が知っていることすべての短い歴史 / B. ブライソン・著

旅行記作家として知られる著者は、ある日ふと心に浮かんだ「自分はこの惑星について何も知らない」という焦燥感をきっかけに、宇宙のはじまりから人類にいたる物語を、科学の視点から一冊の本にまとめる決意をします。天文学、物理学、化学、生物学、地質学、数学、医学、文化人類学などの知見を惜しげなく盛りこみ、読みやすい文章とたっぷりのユーモアで味つけた本書は、600 ページを越える長さを感じさせない第一級のエンターテインメントであり、自然科学の実にすぐれた解説書です。

## 2) ダーウィン『種の起源』を読む / 北村雄一・著

言わずと知れたダーウィンの名著『種の起源』。生物学を志す人なら一度は読んでおきたいものです。ただし本家版は初心者にはややわかりづらく、かく言う私も学生時代に苦労した思い出があります。そこで皆さんにおすすしたいのが本書です。『種の起源』の解説として、これほど丁寧でわかりやすくかつ面白い読み物を私は他に知りません。「今さら 150 年も前の著作なんて…」と思っている人、まずはこれを読んでみてください。

3) フィンチの<sup>くちばし</sup>嘴 — ガラパゴスで起きている種の変貌 / J. ワイナー・著

ガラパゴス諸島にすむダーウィンフィンチの仲間は、適応進化が野外で定量された初めての観察事例としてよく知られています。本書は、グラント夫妻の研究チームによる 20 数年にわたるこの驚

くべき調査の成果を、物語風にくわしく紹介した名著です。これを読めば、自然選択による生物の進化が、過去の出来事についての推論でもなければ、検証不可能な仮説でもないということがよく理解できます。

## 4) ゴウの耳はなぜ大きい？— 「代謝エンジン」で読み解く生命の秩序と多様性 / C. レイヴァース・著

「どうしてアフリカのサバンナにいる大型動物は<sup>ほ</sup>哺乳類ばかりなの？」たとえばそんな子ども時代の素朴な疑問を出発点に、動物の形状や大きさ、その暮らしぶりにまつわるさまざまな謎にせまろうとした、非常に明快かつ刺激に満ちた読みものです。エネルギー生成と熱処理のしくみ（＝代謝エンジン）にもとづいて生物のあらゆる営みをまるごと解き明かそうという著者の意欲的な試みは、自らの疑問に徹底的にこだわることの大切さ、そして考えることの面白さを我々に思い起こさせてくれます。

## 5) 人はなぜ走るのか / B. ハインリッチ・著

昆虫の体温調節に関する研究で有名な著者は、41 才のときウルトラマラソンに挑戦し、みごと全米記録を打ち立てました。この本は、動物界のさまざまな「ランナー」に関する著者自身の研究、その知識にもとづいて彼がウルトラマラソンに向けておこなったあらゆる訓練、さらにそこから得た哲学的考察や人類進化についての新たな視点などについて、さまざまな挿話をまじえながらわかりやすく語った力作です。私は本書を読んで、走ることとそれ以外の人間の営みには多くの共通点があることや、野心や夢、信念を持つという行為そのものが、持久運動によって食料を獲得すべく進化した人類の適応形質であることなど、いろいろなことに気づかされました。単純にスポーツ読み物としても楽しめるので、堅い本が苦手な人にもおすすです。

## 6) 銃・病原菌・鉄 / J. ダイアモンド・著

世の中には、文明の発達度は人種の優劣を反映する、とぼんやり考えている人が案外多いのかもしれませんが。本書はそうした固定観念に強く異を唱え、地球上のかぎられた地域の人々が他の文明を圧倒しているのは、彼らが優れた人種だからではなく、彼らのすむ地域が幸運にも「ある条件」を満たしていたからにすぎないことを指摘します。スケールの大きな謎解きの面白さもさることながら、自らの主張を単なるイデオロギーや持論に終わらせる

のではなく、生物学や言語学の知識を駆使し、あくまでも事実にもとづく考察という形で読者に問いかけんとする著者の姿勢に、科学者としての<sup>きょうじ</sup>矜持と心意気を感じます。数々の名誉ある賞にかがやいた、まさに著者渾身の一冊です。

#### 7) 心はどのように進化するか—双生児が語る新しい遺伝観／安藤寿康・著

人間の能力や性格は遺伝するのか？環境や教育はどこまで有意義なのか？世の人々がとかく目をそむけがちなこの質問に、人間行動遺伝学の立場からあえて真正面から答えようとしたのが本書です。内容はやや高度ですが非常に丁寧に解説されており、双生児を用いた研究のくぐりにはまさに目からウロコの連続です。「人間にとって遺伝とは何か」に関心をもつすべての人におすすめしたい良書です。

#### 8) 風の中のマリア／百田尚樹・著

映画『永遠の0』<sup>ゼロ</sup>の原作者による、オオスズメバチを主人公にした異色の小説です。取材協力者にスズメバチ研究の世界的権威、小野正人博士（玉川大学）の名前が記されているだけあって、舞台背景としての昆虫の生態がかなり正確に描かれています。スリル満点の物語としてだけでなく、楽しみながら学べる生物学の教材としてもすぐれた本です。

#### 9) 書きたいことが書けるライティング術／ケリー伊藤・著

新入生の皆さんにぜひ読んでおいてほしい「<sup>ハウツーもの</sup>指南書」を一冊だけ挙げるとすればこれです。英文の書き方についての本ですが、

ここに書かれたパラグラフ・ライティングなどの基本ルールは、使用言語によらず自然科学の文章に広くあてはまるものです。わずか140ページ足らずの本を読むだけで、レポートや論文を書く際の意識が大きく変わることでしょう。

#### 10) 遠いリング／後藤正治・著

最後に、自然科学とは関連のない本を一冊だけ挙げておきます。本書はボクシングに青春を賭ける名もない若者たちを等身大に描いた、ノンフィクションの隠れた名作です。皆さんが勉強、将来の進路、人間関係などで悩んだ時、ぜひ手にとってみてください。きっと何か得るものがあるはずです。

#### おわりに

昔ある学生から「自分は読むスピードがおそいので本に手を出すのをためらってしまう」と聞かされ、ちょっと残念に思ったことがあります。我々が何をすることもつい効率を気にしてしまうのは、受験勉強のなごりか、それとも費用対効果<sup>コストパフォーマンス</sup>を最大化する生物の本能でしょうか。あたりまえながら、本を読むのに制限時間などありません。むしろ良書はなるべく時間をかけて読むべきです。いつか皆さんにもわかると思いますが、読書にかぎらず物事を成しとげるといふことの本質は、効率云々とはまったく別の場所にあります。ぜひじっくりと時間をかけ、この大学時代に自分自身にとっての素晴らしい本をみつけてください。拙文が、そうした出会いのきっかけとなればさいわいです。

Contributed by Kazuharu Ohashi, Received April 30, 2014.